

Bowles の詩と Coleridge の詩論の発展⁽¹⁾

野 村 孝 司

S. T. Coleridge (1772–1834) は1789年に彼が Christ's Hospital の学生のとき、上級生の Middleton から一冊の W. L. Bowles (1762–1850) のソネット集 *Sonnets on Picturesque Spots* を贈られたが、それ以来 Coleridge はこの詩集に心を引かれ、当時はこれを何部も購入することは経済的に困難であったので、自分で四十部以上の写本を作成して日頃彼が尊敬している人々に最高の贈りものとして寄贈したことは彼の『文学評伝』が説明する通りである⁽²⁾。1792年には Mary Evans 宛の書簡の中で「繊細な詩人 Bowles によって公にされた美しい詩を贈りましょう」⁽³⁾と書き、1793年には Christopher Wordsworth が彼の日記の中で「Coleridge はギリシャ語を話し、Max Tyrius を語り、Bowles の詩をとうとう吟じた」⁽⁴⁾と記している。1794年には Southey 宛の書簡の中で Bowles の詩は「朝の唯一の友達」であると書き、彼の詩に感謝の気持を表わしたソネットを書き送った⁽⁵⁾。1795年には友人 Joseph Cottle が Coleridge に会ったとき、Coleridge が話題にしたのは「Berkeley, Hartley そして Bowles であり、彼は Bowles のソネット集を楽しんで朗読していた」⁽⁶⁾。1796年には実行はされなかつたが、Bowles に関する論文の執筆を計画し⁽⁷⁾、同年10月1日の Thelwall 宛の書簡では Bowles を「心醉の詩人」⁽⁸⁾と呼んでいる。また同年12月には私製の小冊子『ソネット集』 *A Sheet of Sonnets* の序文の中で「Bowles のソネットはいかなる他の詩よりも卓越している」⁽⁹⁾と述べ、同月の Poole 宛の書簡では「心から尊敬する詩人」⁽¹⁰⁾と賞讃している。しかるにそれが最後であつて翌年の1797年からは Coleridge が Bowles を賞讃している個所は皆無なのである。同年9月6日に彼は

Bowles と初対面を行なったが、 Joseph Cottle の『回想録』によれば、不成功に終った⁽¹¹⁾。また Coleridge はかねて彼の詩集第二版を「聖なる涙の泉の天才」Bowles に献じたい旨を Charles Lamb に洩らしていたが、それも実行せず1797年に詩集第二版を出版している。そしてついに数年経過した1802年9月に Sotheby 宛の書簡の中で、Coleridge は Bowles の詩を真っ向から非難した。我々はこの彼の豹変に驚かざるをえない。「賞讃」から「非難」へのこの変転は Coleridge の詩論の発展を解きあかす鍵を秘めているように思われる。従来ともすると哲学的な面から彼の詩論の発展が考察され、具体的な詩を通してみる努力が忘れられがちであった。小論では Coleridge のこの変転に焦点を合わせて、彼の詩論の発展を考察してみたい。

まず我々は Coleridge がなぜ Bowles の詩に心を引かれ賞讃したかを考えてみなければならない。それには Bowles に寄せた彼の詩が二つあるので、それによって考えてみよう。最初は「ミューズに」“To the Muse”なる詩であるが、これは Coleridge が初めて Bowles の詩を読んだ1789年の作であって、Bowles に対して感謝の気持を表したものであろう。その一節を示せば、

For, lovely Muse! the sweet employ
Exalts my soul, refines my breast,
Gives each pure pleasure keener zest,
And softens sorrow into pensive Joy.⁽¹²⁾

なぜなら、美しいミューズよ、きみのやさしい仕事は
わたしの魂を高め、わたしの心をみがき、
純な喜びひとつにつに強い香味を与える、
悲しみを哀愁の喜びに和らげてくれる。

であり、他の一つは1794年の先程ふれた書簡の中で書き送った「W. L. ボウルズ尊師に」“To the Rev. W·L. Bowles”なる詩でありその一節を示せば、

My heart has thank'd thee, Bowles! for those soft strains,

That, on the still air floating, tremblingly
 Wak'd in me Fancy, Love, and Sympathy! ...
 And, when the *darker* day of life began,
 And I did roam, a thought-bewilder'd man!
 Thy kindred Lays an healing solace lent,
 Each lonely pang with dreamy joys combin'd,
 And stole from vain REGRET her scorpion stings;
 While shadowy PLEASURE, with mysterious wings,
 Brooded the wavy and tumultuous mind,...⁽¹⁸⁾

わたしは心から感謝する、ボウルズよ、きみのやさしい調べに、
 きみの調べは静かな大気のうちに震えながら、
 わたしのなかに空想と愛と共感とを呼び醒したのだ...
 わたしのより暗い人生が始まり、
 おもい悩める人となってさまよえるとき、
 きみのやさしい歌はいやす慰みを与える、
 孤独の苦しみを夢のような喜びで結び、
 むなしい後悔からさそりの苦しみをとり、
 神秘のつばさで、おぼろな喜びが、
 わたしの揺れきわぐ心を抱いたのだ。

であり、これらの二つの詩からわかるように、Bowles の詩は彼の「悲しみを哀愁の喜びに和らげ」彼の心の中に「空想と愛と共感とを呼び醒まし」、「思い悩める」彼に「いやす慰みを与える」、「孤独の苦しみを夢のような喜びで結び」、彼の「さそりの苦しみ」を取り除いてくれたのであった。当時彼は故郷から遠く離れて生活しており、ひどい孤独感に苦しんでいたのであるが、その彼にいやす慰みを与えてくれたのが Bowles の詩であった。一体 Bowles の詩は Denham の流れをくむ抒情詩であって当時のジョンソンやボープの形式主義ないしは古典主義から脱却した新しい詩風を持つものであった。彼の詩が Wordsworth や Shelley や Keats らの抒情詩の動因になったことはよく知られているが、Coleridge の場合もかようにいやす慰みを与えてくれたものは、

Bowles の詩の持つ抒情性であった。『文学評伝』において彼は当時のことを回顧して、形而上学や神学論争などの「途方もない研究」に興味を持っていたのであるが、それから救ってくれたものは、部分的には Evans 家の家庭的愛情であったし、大部分には Bowles 氏のソネットの好影響であったことを感謝の念を持って書いている⁽¹⁴⁾。要するに Coleridge が当時求めていたものは、彼の孤独感を癒してくれる家庭的愛情であった。しかしながら常に Evans 家の家庭的愛情に浸っているわけにはいかない。それに反して Bowles の詩はいつも彼の傍にあって慰みを与えてくれた。『ソネット集』の中で彼はソネットを定義して、ソネットとはその中に “lonely feeling” を展開させたものであり、歩いているときも横になっているときも常に生活の中で口ずさみ、「我々の心の中に貯えておくことができるものである」と述べている。

かように Bowles の詩が彼の心をとらえた理由は、彼の「さそり」のような孤独の苦しみに対して「いやす慰み」を与え、Evans 家の愛情に似て彼の心を和らげてくれたからであろう。

では実際に Bowles の詩の具体的な例をあげて考えてみよう。最初は彼のソネット第七番「ウィントンの近くのイッ钦河に」 “To the River Itchin, near Winton” である。

Itchin, when I behold thy banks again,
 Thy crumbling margin, and thy silver breast,
 On which the self-same tints still seem'd to rest,
 Why feels my heart the shiv'ring sense of pain?
 Is it—that many a summer's day has past
 Since, in life's morn, I caroll'd on thy side?
 Is it—that oft, since then, my heart has sigh'd,
 As Youth, and Hope's delusive gleams, flew fast?
 Is it—that those, who circled on thy shore,
 Companions of my youth, now meet no more?
 Whate'er the cause, upon thy banks I bend,

Sorrowing, yet feel such solace at my heart,
 As at the meeting of some long-lost friend,
 From whom, in happier hours, we wept to part.⁽¹⁶⁾

イッチン河よ、まだ全くおなじ色合が漂っているようにみえた、
 おまえの川岸を、おまえのくずれたへりを、
 そしておまえの銀色の胸を見るとき、
 なぜわたしの心は揺れさわぐ痛みを覚えるのか。
 それは人生のあしたわたしがおまえのひとりで歌っていらい
 多くの夏の日が過ぎたためなのか。
 それは以来、青春と希望のいつわりの光がはやく飛び去ったとき、
 しばしばわたしの心が嘆いたためか。
 それはおまえの岸べで輪になって動いていた
 若い連中が、今やもう集らないためなのか。
 原因はどうであれ、おまえの川岸に悲嘆に暮れて腰をおろしているが、
 幸せな時代に泣いて別れ、
 ながいあいだ会ったことのない友の誰かに会ったときのような
 憇みを心に感ずる。

Bowles は学校を出て以来ながいあいだイッchin河を見たことがなかったが、
 オックスフォードへ旅するときこの河に再会して歌ったのがこのソネットである。イッchin河の描写とともにそれから連想される数々の思い出を修辞的な構成を用いて歌っている。作者はこの河に再会して、ながいあいだ会っていない友に会ったように感じ、ある種の孤独の安らぎを覚えている。おそらく Coleridge もこの詩を読んで孤独の苦しみを癒されたことであろう。次はソネット第九番「ドーバーの断崖で」“At Dover Cliffs”である。

On these white cliffs, that calm above the flood,
 Uplift their shadowing heads, and, at their feet,
 Scarce hear the surge that has for ages beat,
 Sure many a lonely wand'rer has stood;
 And, whilst the lifted murmur met his ear,
 And o'er the distant billows the still Eve

Sail'd slow, has thought of all his heart must leave
 To-morrow; of the friends he lov'd most dear;
 Of social scenes, from which he wept to part:

But if, like me, he knew how fruitless all

The thoughts that would full fain the past recall,
 Soon would he quell the risings of his heart,
 And brave the wild winds and unhearing tide—
 The World his country, and his God his guide.⁽¹⁷⁾

静かに海の上に影する頭をもたげ,
 何年ものあいだ, うち続けてきたすその波の音がほとんど聞えない,
 この白い断崖で,
 きっと多くの孤独のさすらい人が立ったのだ.
 そして波の音が持ちあげられて彼の耳に伝わり,
 遠い海に静かな夕暮がゆるやかに進むとき,
 彼は思う, 彼の心があすには残すにちがいないすべてを,
 彼が深く愛した友のことを,
 彼が泣いて別れた社交界の情景のことを.
 だが彼がもしわたしのように過去をひじょうに喜んで思いおこすことが,
 いかにもむなしいかを知れば,
 彼はまもなく心の高まりを静め,
 荒い風と聞こうとしない流れと戦うであろう.
 世界は彼の国, 彼の神は彼の案内者.

これはドーバーの断崖に立つ孤独のさすらい人に対して “pity” を感じて歌ったものである。さすらい人は下方から聞えてくる波の音を聞き、夕暮が次第に深まって行く遠い静かな海を見て、友のことなど昔の回想にふけりながらも、それが空しいものであることがわかれれば勇気を出してまた雄々しく前進するのである。Coleridge 自身もまたこのさすらい人のごとく孤独を感じながら、この詩によって励まされたに違いなかろう。次はソネット第十一番「オステンドにて」“At Ostend” である。

How sweet the tuneful bells' responsive peal!

As when, at opening morn, the fragrant breeze
 Breathes on the trembling sense of wan disease,
 So piercing to my heart their force I feel !
 And hark ! with lessening cadence now they fall,
 And now, along the white and level tide,
 They fling their melancholy musick wide ;
 Bidding me many a tender thought recall
 Of summer-days, and those delightful years
 When by my native streams, in life's fair prime,
 The mournful magick of their mingling chime
 First wak'd my wond'ring childhood into tears !
 But seeming now, when all those days are o'er,
 The sounds of joy once heard, and heard no more.⁽¹⁸⁾

調子のよい鐘の響きわたる音はなんと快いものであろうか。
 朝はやく、香しいそよ風が、
 震える青白い病的な感覚にそよぐときのように、
 鐘の音の力はひどくわたしの心にしむのを感じる。
 そして聞け、今や調子をさげて鐘の音は低くなり、
 そして今や白く平らな潮に沿い、
 深い物思いの調べを放つのを。
 そしてわたしに多くのやさしい想い出を起こさせる
 夏の日の、そしてわたしの故郷の小川のほとりで血氣盛んなころ、
 その混ざり合う旋律の悲しげな魔力が
 すばらしい子供時代を初めて目覚めさせ泣かせたあの楽しいころの。
 だがすべてこれらの日々が終った今は、
 一度聞かれ、もう二度と聞かれない喜びの音のように思われる。

オステンドの物うげな鐘の音が響き渡るのを聞くと作者は楽しかった子供時代のことを回想せんにはいられない。そして孤独の淋しさを楽しい想い出で結びつけてくれ、そこから Coleridge はある種の安らぎを覚えたのであろう。また彼にとってはこの安らぎを与えてくれるもののが、Bowles の詩の美しさであったのである。1794年に彼はある書簡の中で Bowles の詩の美点に触れ、

「イメジャリーがほとんどいつも周囲の風景によって鼓舞されているらしいことは Bowles の主要な卓越性であろう」⁽¹⁹⁾と書き送っており、また前に触れた『ソネット集』の序文においては、ソネットとは“lonely feeling”を展開させたものであると述べたすぐあとで「道徳的感情 (moral sentiments), 愛情 (affections) あるいは感情 (feelings) が自然の風景 (scenery of Nature) より由来し、それと関連せられているソネットが最も美しいものに思われる。かかるソネットは知的世界 (intellectual world) と物質的世界 (material world) との美しくも分離できない融合をつくり出す。……それゆえ、Bowles のソネットは他のいかなる詩よりも卓越している」⁽²⁰⁾と述べている。これによって Coleridge が今や Bowles の詩に関して見方を深めてきていることがわかる。上に引用した Bowles の三つのソネットにおいても、それぞれ “lonely feeling” を展開したものであり、自然の風景とそれによって思い出される作者の感情とを見事に織り混ぜ、いわゆる物質的世界と知的世界との融合を実現し、その詩の美しさとなっている。「イッチン河に」においては河の情景と昔の友の想い出、「ドーバー河に」においては夕暮の次第に深まる遠い海の風景とかつて深く愛した友のこと、「オステンドにて」においては鐘の音の響き渡るオステンドの風景と子供時代の楽しい日々のことを、それぞれ結びつけている。

かように Bowles の詩は自然の情景という物質的世界と過去の想い出という知的世界との融合をつくり出し、Coleridge に「癒す慰み」を与えたのであり、彼は Bowles の詩におけるこの両者の融合を最も好みかつ賞讃したのである。

しかるにこの融合の仕方こそがやがて彼の非難の対象となった。

1796年の暮をもって Coleridge が Bowles の詩を賞讃するのは終り、その後は皆無であることはすでに述べた。そして1802年9月1日付の Sotheby 宛の書簡の中で突然 Bowles の詩は非難されたのである。その書簡に従えば Bowles の詩の欠陥は「すべてのものを道徳化するあくことなきトリック」であると断言し、続けて次のように書き送っている。彼の詩は「自然の興味ある現象を見たり描いたりするときは必ず道徳界とのおぼろげな類似でそれを結び

つけており、従って印象が薄くなるのであります。自然というものは固有の主張を持っているものであります。そして万物がそれ自身の生命を持ち、しかも私たちすべてが一つの生命であることを信じかつ感ずる人は自然の固有の主張が何であるかを知るであります。詩人の感情と知性とは自然の偉大な現象と結合され、密接に融合さるべきであります。そして単に形式的な直喩 (formal similes) の形で自然の事物と融合し、ゆるい混合の状態に保たれるのではありません。私はこれらの形式的な直喩を排除するつもりはありません。それには自然な精神の情調があります。よろこばしい精神の情調があります。そして詩人はよくこれを持っており表現するものであります。最高の情調ではありませんし、また最適の情調でもありません。その情調とは、かつて私が『散文により適した』と訳しました “*Sermoni propiora*” であります。実際 Bowles は詩人の感受性は持っておりますが、偉大な詩人の情熱は持っておりません。」⁽²¹⁾(傍点原文) 以上が Bowles および Bowles の詩に対する Coleridge の非難の大部分である。

先程の引用のソネットからわかるように Bowles の詩において自然の情景という外的な物質的世界は、詩人の回想という内的な知的世界を提供する素材となっていて、それは I. A. Richards の説く Tenor と Vehicle との関係に立っていると言うことができよう。Bowles の詩の具体例を今少し要点をしづらせて紹介しよう。

For this a look back on thy hills I cast,
And many a soften'd image of the past
Pleas'd I combine, and bid remembrance keep,...

(Sonnet VI. “On Leaving a Village in Scotland.”)⁽²²⁾

これゆえにおまえの丘をふりかえり、
過ぎし日の多くのこころよい姿を
喜んで結びつけ、記憶に覚えているように命ずる。

(ソネット第六番「スコットランドの村を去るとき」)

Evening, as slow thy placid shades descend,

Veiling with gentlest hush the landscape still,
 The lonely battlement, and farthest hill
 And wood, I think of those that have no friend, ...
 (Sonnet V. "Evening.")⁽²³⁾

夕暮よ、ゆるやかにおまえの穏やかな影が、
 柔らかな静けさで、ひっそりとした風景、
 寂しそうな狭間そして遠い丘や
 森を包んで降りるとき、わたしは友のない人のことを思う。
 (ソネット第五番「夕暮」)

Scenes of my youth, reviving gales ye bring, ...
 (Sonnet XVI. "On a Distant View of England.")⁽²⁴⁾
 元気をとりもどす風よ、おまえたちは青春の情景をもたらす。 ...
 (ソネット第十六番「英国遠景」)

The murmurs of thy wand'ring wave below
 Seem to his ear the pity of a friend.
 (Sonnet IV. "To the River Tweed.")⁽²⁵⁾

下方に聞えるおまえのさすらう波のつぶやきは、
 旅人の耳には友のあわれみに思われる。
 (ソネット第四番「ツィード河に」)

...the sound of thy glad bells, ...
 ...most true it speaks the tale
 Of days departed, and its voice recalls
 Hours of delight and hope in the gay tide
 Of life, and many friends now scatter'd wide
 By many fates ...
 (Sonnet XXVII. "On Revisiting Oxford.")⁽²⁶⁾

おまえの喜ばしい鐘の音を ...
 たしかにそれは過ぎ去った日々のことを語り、
 その声は思い出させる
 楽しかったときを、人生のはなやかなころの希望を、
 今はいくたの運命によって
 広く散らばっている多くの友のことを。

(ソネット第二十七番「オックスフォード再訪」)

...remov'd

From life's vain coil, I listen to the wind,
And think I hear meek sorrow's plaint,...

(Sonnet III. "To the River Wensbeck.")⁽²⁷⁾

世俗のむなしいわざらしさより離れて、風の音を聞き、
わたしはやさしい悲しみの嘆きを聞くように思う。

(ソネット第三番「ウェンスベック河に」)

When I lie musing on my bed alone,
And listen to the wintry water-fall;
And many moments that are past and gone,
(Moments of sunshine and of joy) recall;...

("Elegiac Stanzas." ll. 1-4.)⁽²⁸⁾

ひとり床で横になってもの思いにふけり、
冬の滝の音を聞けば、
すぎ去ったいくたのとき（日ざしと喜びのとき）が思い出される、...
(「哀歌」ll. 1-4)

これらによって、いずれも “lonely feeling” を展開しながら物と心の世界とを融合させていることがわかるのであるが、これはすなわち自然の情景を「道徳化するあくことなきトリック」であって、Coleridge が非難するところなのである。なぜなら自然の情景という客観と詩人の過去の経験の一駒である主観との結合の仕方は、Wimsatt が指摘し M. H. Abrams が同意しているように⁽²⁹⁾、Coleridge のいみ嫌った Hartley の連想心理学でいう近接法(contiguity)という一種の連想作用のメカニズムである。そのメカニズムにおいて、主観である人間の精神は常に外界の「怠惰な傍観者」⁽³⁰⁾となり受動の形をとる。作者の精神はそのメカニズムの命ずるがままに自然を描きさえすればよいのである。従って詩において描かれた自然は客観としてはあくまで死せるものである。この連想作用というメカニズムによる主観と客観との結合の仕方は、従って「おぼろげな類似」によるものであり、単に「形式的直喩」の形で結ばれ、「ゆる

い混合」の状態に保たれるに過ぎない。1796年の『ソネット集』の序文ではこの両者は美しく分離できない融合とみなされていたが、ここに至ってその融合の不完全さが見破られたのである。

それでは主観と客観との理想的合一はいかにして得られるであろうか。そのためには、上述の書簡にあるごとく、まず理想の詩人は自然つまり万物がそれ自身の生命を持っており、その個々の生命は主観をも含めてさらに大きな一つの生命体 (one life) を形成していることを信じかつ感じなければならない。のために詩人は「感情」だけではなく「知性」がなければならぬ。この両者を持ち合せて初めて詩人の「情熱」が生れ、それによって万物の生命体の把握ができるのである。Bowles は「感情」は持っていたのであるが、「知性」を持っていなかったがために、換言すれば「思想家」ではなかったがために、万物の生命体の認識を得ず、従って彼の描く客観はあくまで客観であり主観と客観との合一の実現をみなかったのである。物の個々に存する生命を見ることができれば、同じ生命体である主観が客観なる対象に向うのであるから、物の精神つまり Coleridge がのちに言ういわゆる “Natur-geist”⁽³¹⁾を描くことができるのである。詩人という主観の「全精神」(whole soul)⁽³²⁾を働かせて対象にそれを投入することによって、そこに内在する真の ideal な姿を見ることができるのである。換言すれば、精神は Bowles の詩におけるように自然である客観の事物でもって自己の過去の経験の一駒を連想するのではなくて、自然という外的媒体を通してその向うにある内的実在を見ることである。つまり with ではなくて through であり、受動の精神ではなくて能動の精神であり、*a posteriori* ではなくて *a priori* であり、経験ではなくて啓示であり、Coleridge の比喩で言えば、“Cis-Alpine”ではなくて“Trans-Alpine”⁽³³⁾である。

かくて理想の詩の表現方法は象徴 (symbol) という形をとらざるを得ない。1805年の彼の手記の中で、「考えごとをしているとき 露にねれた窓のガラス越しに遠くのほんやり光っている月などの自然の事物をながめているとき、私は何か新しいものを観察しているというよりむしろ、私の内部にすでに存在しそ

して永久に存在する何かに対する象徴的言語 (symbolical language) をさがし、いわば求めているように思われる。たとえ何か新しいものを観察している場合でも、やはり私はその新しい現象が私の内的本性の忘れられた、またかくされた真理のおぼろげな目覚めのごときあいまいな感じをいつも持つのである。」⁽³⁴⁾と記している。それは “*Forma formans per formam formatam translucens*”⁽³⁵⁾すなはち *forma formata* を通して *forma formans* の世界を「透し見ること」(*transluceo*) である。つまり自然の事物という外的な有限の中に無限を見、瞬間に永遠を見、特殊の中に普遍を見ることであり、これが象徴作用であった。この作用によってのみ主観と客観との合一がなされる。1797年のある書簡の中で、彼は自然の風景のことに触れて、「私の精神はしきりに何か偉大なもの——何か一体にして分ち難いものを見、そしてそれを知ろうとしているように感じます。」と書き、また岩や山や滝は「莊厳さ」を持ち「万物は無限性を写している」⁽³⁶⁾とも書いている。Coleridge が 1802年に Scafell Pike に登ったときに書いたという「シャモニ谷の日の出まえの讃歌」“*Hymn before Sun-Rise in the Vale of Chamouni*”⁽³⁷⁾は George Watson も言うように⁽³⁸⁾、その意味での一つの実験であったのであろう。Coleridge は言う、「詩的感情」とは大きな櫻の木の曲り易い枝のようなものであって、嵐にいかに揺れようとも常に真理という固定した幹の近くにあるのである⁽³⁹⁾と。

かくて Coleridge は Bowles の詩の主観と客観との「おぼろげな類似」と「ゆるい混合」という欠点を指摘し、それを認知した上に立って、ギリシャの宗教詩とヘブライのそれとの間にある質的差異を援用しながら、同じ Sotheby 宛の書簡の中で、公的には彼の生涯において初めて fancy と imagination とを区別した。彼は前者を「精神の集合的能力」“*the aggregating faculty of the mind*”と、また後者を「改変的で結合的能力」“*modifying and co-adunating faculty*”⁽⁴⁰⁾と定義し、彼の本格的詩論への第一歩を踏み始めたのである。

1797年以後は Bowles の詩に対する賞讃が皆無であることは再三触れたが、この突如賞讃を停止させた起因は、申すまでもなく Wordsworth との親交で

あつた。1797年6月 Coleridge が Wordsworth 家に滞在していて、Wordsworth が自作の詩を朗読したときに受けた、啓示にも近い感動は「深遠な思想と深い感情との融合」であり、「観察されるものを修飾するときの想像的能力と、観察するときの真理とのすばらしい均衡」⁽⁴⁾であった。そしてこの感動は彼の生来的な先駆的な資質に作用して、彼の *annus mirabilis* が生れ、またそこから彼の詩論が打ち建てられていった。主觀と客觀との合一をもたらす imagination の詩は Wordsworth のそれであり、その両者の結合が不完全である fancy の詩は Bowles のそれであったことは間違いないであろう。

かようにして Coleridge が Bowles の詩を「賞讃」し、その後「非難」へと変転した唯一の理由は、彼が詩における主觀と客觀との合一の質を見破ったからであった。そこに我々は pre-romantic としての Bowles の詩の限界を見ると同時に、Coleridge の詩論の発展の跡を見ることができる。今や Bowles の詩は主客の合一という点において失格の詩ではあったが、Coleridge の詩論の発展において fancy の例として踏台の役目を果したことは確かである。

(1969, 8)

〔註〕

- (1) 本稿は第41回日本英文学会大会（於龍谷大学深草学舎、昭和44年5月31日）で発表したものに一部補筆したものである。
- (2) J. Shawcross, ed., *Biographia Literaria* (Oxford, 1907), I, p. 9.
- (3) Earl Leslie Griggs, ed., *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* (Oxford, 1959), I, p. 29.
- (4) Quoted by J. B. Beer, *Coleridge the Visionary* (London, 1959), p. 76.
- (5) Griggs, *op. cit.*, I, p. 133.
- (6) Richard W. Armour & Raymond F. Howes, ed., *Coleridge the Talker*, (Oxford, 1940), p. 185.
- (7) Kathleen Coburn, ed., *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge* (London, 1957), I, entries 161, 170. Griggs, *op. cit.*, II, p. 839.
- (8) *Ibid.*, I, p. 259.
- (9) Ernest Hartley Coleridge, ed., *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor*

- Coleridge (Oxford, 1912), II, p. 1139.
- (10) Griggs, *op. cit.*, I, p. 259.
 - (11) Armour & Howes, *op. cit.*, p. 185.
 - (12) E. H. Coleridge, *op. cit.*, I, p. 9.
 - (13) *Ibid.*, I, p. 84.
 - (14) Shawcross, *op. cit.*, I, p. 10.
 - (15) E. H. Coleridge, *op. cit.*, II, p. 1139.
 - (16) Reverend W. L. Bowles, *Sonnets and Other Poems* (Ninth Edition, Bath, 1805), p. 11.
 - (17) *Ibid.*, p. 13.
 - (18) *Ibid.*, p. 15.
 - (19) Griggs, *op. cit.*, I, p. 139.
 - (20) E. H. Coleridge, *op. cit.*, I, p. 1139.
 - (21) Griggs, *op. cit.*, II, p. 864.
 - (22) W. L. Bowles, *op. cit.*, p. 10.
 - (23) *Ibid.*, p. 9.
 - (24) *Ibid.*, p. 20.
 - (25) *Ibid.*, p. 8.
 - (26) *Ibid.*, p. 34.
 - (27) *Ibid.*, p. 7.
 - (28) *Ibid.*, p. 129.
 - (29) W. K. Wimsatt, "The Structure of Romantic Nature Imagery," *The Age of Johnson*, (Yale Univ. Press, 1949). Reprinted in *The Verbal Icon* (Lexington, 1954), p. 109. M. H. Abrams, "Wordsworth and Coleridge on Diction and Figures," *English Institute Essays* (New York, 1954). Reprinted in K. Coburn ed., *Coleridge* (New York, 1967), p. 133.
 - (30) Griggs, *op. cit.*, II, p. 709.
 - (31) Shawcross, *op. cit.*, II, "On Poesy or Art", p. 259.
 - (32) *Ibid.*, II, p. 12.
 - (33) *Ibid.*, II, p. 164.
 - (34) Coburn, *op. cit.*, entry 2546.
 - (35) Shawcross, *op. cit.*, I, p. 187.
 - (36) Griggs, *op. cit.*, I, p. 349.
 - (37) E. H. Coleridge, *op. cit.*, I, p. 376.

- (38) George Watson, *Coleridge the Poet*, (London, 1966), p. 135.
- (39) Griggs, *op. cit.*, II, p. 864.
- (40) *Ibid.*, p. 865f.
- (41) Shawcross, *op. cit.*, I, p. 59.